東京福祉大学・大学院紀要 第2巻 第2号（Bulletin of Tokyo University and Graduate School of Social Welfare） p133-140（2012, 3）

知的障害者のグループホーム従事者による利用者のコンピテンス評価の課題
－全国調査による一人暮らしのニーズに対する阻害要因から－

寺島正博

東京福祉大学　社会福祉学部（池袋キャンパス）
〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-14-2
（2012年1月6日受付、2012年3月1日受理）

抄録： 本研究は、知的障害者のグループホーム（以下、GHと省略する。）従事者による利用者の一人暮らしのニーズが阻害されるケースを基に、利用者のコンピテンス評価と、その課題について分析と検討を行うことを目的とした。インタビュー調査の対象者は、筆者が以前に行った全国アンケート調査を下に、利用者が一人暮らしのニーズを持つと認識している9人の従事者である。分析については「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」の手順に従い、11の概念と5つのカテゴリーにまとめた。結論としては、一人暮らしのニーズに対する阻害因子の根源には「低いコンピテンス評価」があった。そのため、①「スーパービジョン」の体制を確立させる、②GH従事者による研修制度を充実させる、③第三者によるコンピテンスの評価を取り入れることが必要であるとした。また、GH施策については「質」と「量」の両方が伴う施策を進めていくことが必要であるとした。
（別刷請求先：寺島正博）

キーワード： 知的障害者、グループホーム、従事者、一人暮らし、コンピテンス

緒言

岬龍一郎（2011）は、中国の思想家である「老子」を次のように表現している。

「雲のように、水のように、自由に生きる」、人は誰しも自由で気ままな生活に憧れを感じている。そして、このことは知的障害があっても同じである。

近年、一人暮らしを希望する知的障害者は増加傾向にある。厚生労働省が5年毎に実施する知的障害児（者）基礎調査（以下、「2000年調査」「2005年調査」と表す。）によれば、2000年調査では全国で一人暮らしを希望する知的障害者は約16,800人であったものが、2005年調査には約26,900人と1.6倍にも膨れ上がっている。これは同調査における「将来の生活の場の希望」のなかで「GH」や「親と暮らしたい」を抑えて、最も高い伸び率を示している。しかし、全国で一人暮らしをしている知的障害者については、2000年調査では約11,300人であったものが、2005年調査には約16,200人であったことから、現実には約4,900人の増加に留まっている。そして、同調査において現在の「生活の場の状況」のなかで、最も増加しているのは「GH」という結果であった。

このことから、GHにおいては、一人暮らしを希望していたが、何らかの理由によって、GHの生活となった利用者が相当数いることが予想され、また、近年の一人暮らしを希望する知的障害者の増加傾向から、GHでの生活から飛躍して一人暮らしを希望する利用者も相当数いることが予想される。

それでは、これらのニーズに対して、どのような施策が執られているのであろうか。厚生労働省（2004）においては、「地域での暮らしの選択肢として、グループホームでの生活から一人暮らしへの支援を確立する必要がある」として、GHからの一人暮らしへ向けた積極的な検討を進めている。また、障害者自立支援法においては、自立生活支援加算の創設によって、GHからの一人暮らしへ向けた制度もある。

このように、知的障害者の一人暮らしのニーズが明らかとなるなかで、それに向けた制度も整備されつつある。しかし、実際に一人暮らしは進んでいないのが実情である。この要因については、知的障害者本人が抱える課題や、その親族の意向も挙げることができるが、GHといった少人数制の限られた居住空間のなかでは、従事者が齎す要因も大きいのではないだろうか。

これまで発表された研究においては、GH従事者の態度や価値観によって利用者の自己決定が阻害されるケースが報告されており（薬師寺・渡辺, 2007）、また、筆者が勤めた

知的障害者の生活ホームにおいても、従事者の援助によっては症状の悪化を引き起こしてしまうケースや、利用者が退去してしまうケースまであった。

そこで、「GH従事者が行う一人暮らしへの援助」についての先行研究をレビューしたところ、それを明らかとする試みはほとんど見ることができなかった。しかし、これに関連した実践については報告されており、知的障害者入所施設からの一人暮らしへ向けての援助に対する実践については、従事者が知的障害者のパーソナリティや能力をとらえたうえで環境を整えていくことが必要であると指摘されていることや(金森, 2001)、また、地域で一人暮らしをする知的障害者を支える援助の実践については、障害のある人個々のエンパワーメントに主眼をおいた援助が従事者には求められていると指摘されている(牛谷, 2002)。

これら二つの内容は、何れも知的障害者が持つ「能力」に焦点が注がれている。しかし、知的障害者が一人暮らしをするためには、単に「〜できる」といった能力だけに留まるものではない。そこには「本能的や生得的であって学習的に環境を自らの選択によって効果的に誘導する能力(White, 1959)」、すなわち、「コンピテンス(competence)」といった広い概念の能力が、これまで以上に要求されてくる。そして、GH従事者はこの利用者の「コンピテンス」を十分に評価し、一人暮らしへ向けた援助を展開していかなければならないのである。しかし、一人暮らしが進んでいない状況を考えれば、従事者のこのような評価に課題が生じているのではないだろうか。

そのため、本研究はGH従事者による利用者の一人暮らしのニーズが阻害されるケースを基に、従事者はどのように利用者のコンピテンスを評価し、その評価にはどのような課題が生じているのかについて分析と検討を行うことを目的とした。

研究対象と方法

1. 調査対象者

筆者が2008年に実施したGH従事者の全国アンケート調査の回答をもとに(寺島, 2012)、利用者が一人暮らしのニーズを持つと認識している従事者から、承諾を得た9人にインタビュー調査を行った。調査対象者は表1の通りである。

2. データの収集方法

インタビュー調査は、2009年12月20日から2010年4月15日の約4ヶ月間に渡って半構造化面接により実施した。その際、研究の趣旨を始め、プライバシー保護を遵守することや結果の利用方法、更にはICレコーダー・メモの使用についての説明を行い、GH従事者からの承諾を得た上で、記録ができたものを全て逐語録としてデータ化した。

インタビュー時間は1人あたり40分〜60分であり、実施場所については面接室、事務室、会議室、世話人室で行った。

3. 倫理的配慮

GH従事者には口頭によって調査目的を説明しており、調査内容については本研究以外には一切使用しないことを厳格に伝えた。また、調査結果については調査対象者の施設名や個人名が特定されることのないよう特段の配慮も行った。

4. 分析視点

研究方法は「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」(以下、M-GTAと省略)の手順に従って分析を行うことにした(木下, 2005)。本研究においてM-GTAを採用した理由については、M-GTAが現象の記述的な整理を目的

表1. インタビュー調査対象者属性

地区	年代	性別	勤続年数	最終学歴	主な所持資格	利用者数(GH数)
北海道	20歳代	女	3年	福祉系大学	ホームヘルパー	17人(4)
北海道	40歳代	男	6年	福祉系大学	ホームヘルパー	50人(11)
北海道	30歳代	男	17年	福祉系以外の短大	介護福祉士	55人(11)
大阪府	20歳代	男	4年	福祉系専門学校	ホームヘルパー	4人(1)
岡山県	50歳代	男	4年	福祉系以外の高校	なし	13人(3)
岡山県	50歳代	男	9年	福祉系以外の大学	ホームヘルパー	24人(6)
長崎県	20歳代	女	3年	福祉系以外の短大	なし	29人(6)
大分県	30歳代	男	5年	福祉系専門学校	社会福祉士	28人(4)
宮崎県	20歳代	女	2年	福祉系大学	社会福祉士	45人(9)

とするのではなく、何故そのような現象となるのかを明らかにする研究方法であって、説得性に長けており、限定的な領域における人間行動の予測と説明に適しているからである。

5. 分析方法

分析方法については、M-GTAの手順に従い、インタビュー調査の逐語録を読むことから始めていき、GH従事者の感情やニュアンスを含めた内容の把握を行った。特に「一人暮らしの阻害因子」「コンピテンス」に関連する個所については、テーマに沿って従事者の揺れ動く心情的側面と現状についてのマーキングを行い、従事者の認識、行為、感情についての解釈を行った。

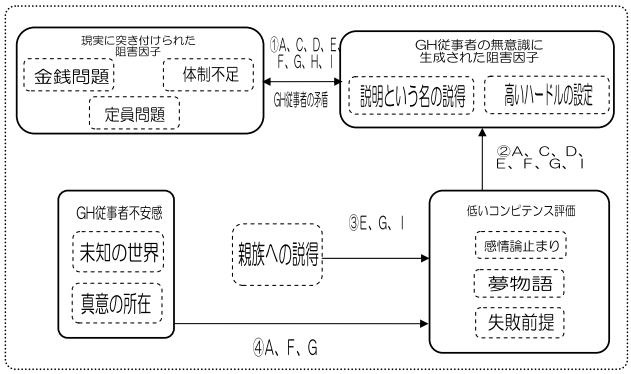
なお、コーディングとカテゴリーの作成については、研究者からの視点として、社会福祉研究者3名からの助言を得ており、実践現場からの視点としてはGH従事者1名からの助言を得ている。

結果

以下、カテゴリーを中心に説明をし、カテゴリー〈　〉、概念〔　〕、筆者の言葉(　)で表す。結果として11の概念を生成し、5つのカテゴリーにまとめることができた。これらのカデゴリー関係を図1に示す。かぎ括弧「　」を用いた口語体の文章は、逐語録のデータをそのまま引用したものである。また、逐語録の前にはインタビュー調査対象者をアルファベットで明記し、それを明確とするためにアンダーバーを使用している。

1. 現実に突き付けられた阻害因子

一人暮らしへの阻害因子としては〈現実に突き付けられた阻害因子〉というカテゴリーを生成した。これは利用者が一人暮らしへの意向を示した際、現実的に遭遇する課題が示されたものである。しかし、これらの課題には既に解決策が存在しているため、ここで問題となるのは、その解決策を実行しないことにある。〈現実に突き付けられた阻害因子〉は〔金銭問題〕〔体制不備〕〔定員問題〕の3つの概念から構成される。



注１：概念 ┆┆ カテゴリー ▭。
注２：数字①～⑧はカテゴリー間の関係性を示す（考察において説明）。
注３：アルファベットA～Ｉは、インタビュー調査対象者を示す。

図1. 一人暮らしへの意向に対する「阻害因子」の認識

1）金銭問題

C「ほんと、言えばすんなり出してあげたい部分もあるんですけど、やっぱり経済的な部分」、D「金銭面がたぶん大きいと思いますね。…(中略)…、やっぱりパート的なことなので、月々にすると足りなくなるかと」、E「やっぱりお金が一番、たぶん皆さん問題になってきてまして」、F「お一人で暮らすにはなかなかちょっと。…(中略)…、経済的になかなか余裕のない、年金と工賃ぐらいの余裕のない方なのでね」、G「日銭ぐらい渡さんと金銭管理ができないという人もいるんです」という発言がある。

GH従事者は利用者の主な収入源が障害基礎年金や作業所等の工賃であること、さらには利用者による金銭管理が困難であることから、一人暮らしが難しいと判断している。しかし、このような理由であれば抽選等は厳しいが、公営住宅の提言や生活福祉資金貸付制度の活用、さらには日常生活自立支援事業等の活用がある。そのため、このような援助へと展開されていないことに問題があるとした。

2）体制不備

A「なかなかね。そこまで時間を取ることができなかったり。日中の活動も並行してやってますよね」、D「出したら出したでバックアップ的なフォロー的なことをどうするかっていうのも、ここも組織的には作ってないので。私たちでフォローできるのかってなると難しかったりするので踏み込めない部分がありますね」、G「一人暮らしがしたいと、これが意志がはっきりした。その方を支える体制が組めないからごめん、もうあなたは待ってくれということで申し訳ない、うちが支援が組めないんだと、いうことを話したんです」、H「どうしても(人手が足りない)現実をみてしまいますよね」、I「あとスタッフの関係がですね、整わない。支援体制がですね」という発言がある。

GH従事者は、バックアップ施設を含めて一人暮らしへ向けた体制が整っておらず、また、従事者の日々の業務も手一杯で、一人暮らしへ向けた援助ができないと考えている。しかし、このような体制の不備や人手不足が解消されたことによって、果たして本当に利用者の一人暮らしは実現されるのであろうか。そして、福祉現場において体制の不備や人手不足は慢性的な課題として挙げることができる

他、人手不足についてはヘルパーの利用や非常勤職員の採用等と手立てを講じることも考えられる。

3）定員問題

E「1回出てしまってその方がいた部屋が、こっちが埋まってしまったらその人はもう行くとこがなくなってしまうんで、慎重になってしまうんですよね。…（中略）…部屋は取っておけないんでね、やっぱり」という発言がある。

GH従事者は利用者の一人暮らしを進めていくために、このような実情も考慮して行わなければならない。そのため、一人暮らしに向けた援助が慎重になるとする見解なのだが、このような物理的な問題についても、従事者は社会資源の開発や活用を図ることによって、その可能性を探る必要があるのであろう。

2. GH従事者の無意識に生成された阻害因子

一人暮らしへの阻害因子としては〈GH従事者の無意識に生成された阻害因子〉というカテゴリーを生成した。これは一人暮らしへの意向が表明された際、GH従事者が必要と感じているコンピテンスと、従事者が理解している利用者のコンピテンスに対して、相当のギャップが生じていれば、従事者自身が無意識のうちに阻害因子と化してしまうことを意味している。〈GH従事者の無意識に生成された阻害因子〉は〔説明という名の説得〕〔高いハードルの設定〕の2つの概念から構成される。

1）説明という名の説得

A「うーん、困ったね、…（中略）…。いくら掛かって、今のお給料は、家借りるのはこれぐらい掛かってとか、光熱費これぐらい掛かって、ちょっと無理だね、みたいな」、C「ルールとかそういうのが守れないんであれば、やっぱり一人暮らしというのは難しいんだよということも、話はしてます」、E「（利用者が一人暮らしの話を）1回して、まあ明らかに自分の能力と夢が懸け離れてるときは、そこを言えば、“うーん、そうですね。まだですね”みたいで、それで終わってしまえば、それはそこで終わりますね」、F「こんだけ前警察に呼ばれたりするのは、…（中略）…（一人暮らしをすると援助が）薄くなっちゃうでしょう」、G「（GHと）何が違うかというと世話人さんはもういないからな言うて。そこは自分でやらないかんよってね。ヘルパー来るけど自分でやることはたくさん増えるから言うてね。その辺がちょっとね、みんな苦しむとこですね」という発言がある。

GH従事者は「GH」と「一人暮らし」について、どのような違いがあるのかを「説明」している。しかし、従事者が利用者のコンピテンスについて、相当のギャップを感じていれば、その「説明」は徐々に「説得」へと内容を変えていき、そのギャップが大きければ大きい程「説明」ではなく「説得」が行われることになる。

2）高いハードルの設定

A「“もっとこういうところ、こういうふうにしないと駄目だよ”とかっていう話をする中で、本人がそれに向かって頑張るかとか、できるのかとか、そういうところもあると思うので」、C「一人暮らししたいとなれば、“じゃあさ”っていう話をいろいろ。…（中略）…、そういうルールの部分だったり、世間のそういう、ここ（GH）での生活の中で身に付けなきゃならない部分ってありますよね」、D「作業所でとりあえずお給料たくさんもらえるようにがんばってとか」、G「ちょっとこの人の場合は無理だなっと思ったらこの辺の課題はもう少しもうちょっとここができるようになったら考えよう」、H「自分で決める。それがね、できない限りまだゴール（一人暮らしの実現）じゃないなと僕らは思っていますけど、はい」、I「（一人暮らしの）目標持つことはいいと思うんですけど、やっぱり今するべきこと、このホーム内のルールをちゃんと守ることだったり、他の方との関係をちゃんといいものにすることとか、そういうのがもう一人暮らしというか地域社会、地域生活を送る上で大切なことなので、今できてなければそれは一人暮らしをしてもできないからっていう話をしてます」という発言がある。

GH従事者は一人暮らしへ向けての課題を設定することになる。しかし、従事者は利用者のコンピテンスについてギャップを感じていれば、その大きさに応じて高いハードルを設定することになる。しかし、このような高いハードルは容易に成し遂げることができるものではなく、また、漠然としていることからこそ、利用者を困惑させることにもなる。そして、従事者のこのような言動は、時として利用者の一人暮らしに対する意欲を喪失させてしまい、その思いを摘み取ることにも繋がる。

3. 低いコンピテンス評価

一人暮らしへの阻害因子としては〈低いコンピテンス評価〉というカテゴリーを生成した。一人暮らしについてはGH利用者のコンピテンスが重要な鍵を握る。そして、従事者がそのコンピテンスをどのように評価しているかによって、援助は大きく異なってくる。このカテゴリーは従事者が利用者のコンピテンスを低く評価しているケースである。〈低いコンピテンス評価〉は〔感情論止まり〕〔夢物語〕〔失敗前提〕の3つの概念から構成される。

1）感情論止まり

A「やっぱり（一人暮らしの）思いがはっきりある人たちには、最終的にそういうふうに持っていけるのがベストかなと思っています」、D「そう（一人暮らしのニーズを）いわれてる方はできるなら出したいなって思いはあります」という発言がある。

GH従事者は、利用者が一人暮らしの希望を持っているのであれば、その願いを叶えてあげたいとする内容である。しかし、従事者の発言は飽くまでも「思う」といった感情論に止まっており、実行性の伴った「行う」といった発言にはなっていない。このような発言の裏には、従事者のなかで利用者コンピテンスを低く評価しているため、行動へ移すといった原動力には至っていないのであろう。

2）夢物語

E「夢だけが上にいってしまってて現実的じゃない」、F「1人で暮らすとやっぱり、僕は親心を抜きにしても、ちょっと何ていうかな、こんなこと言っちゃいけないのかな、グループホームは早過ぎたのかな」、G「人がいつでも駆けつけれるんだって言ってもやっぱり今の形じゃ難しい人もたくさんいますね」、I「ただ現実とその本人さんたちとの気持ちのギャップというのはどうしても出てくるんです」という発言がある。

この発言内容からGH従事者は、利用者のコンピテンスをかなり低く評価していると判断することができる。このような状況においては、当従事者だけの評価ではなく、他者（第三者）によるコンピテンスの評価も取り入れ、エバリエーションを行う必要があるのではないだろうか。

3）失敗前提

A「そうなった（一人暮らしで失敗した）ときにつらいのは本人かな」、C「うちらとしては守ってあげたいという部分が働いちゃうので」、D「救急車で運ばれたっていうのがあって。そういうことを繰り返さないかなっていう心配を私はしていたりとかですね」、F「ただ、何かあったときのために、われわれが支援したほうが本人のためにいいだろうということで、グループホームにいらっしゃる方がいます」、E「一人暮らししたいというのが強いのは強いんですけどね。でも、外に働きに行くのに不安も大きいんですよね」という発言がある。

GH従事者は、利用者のコンピテンスを低く評価しているからこそ、失敗やトラブルを前提としていることが分かる。このような前提は利用者を過保護にしてしまう他、パターナリズムを助長させることにも繋がってしまう。そして、従事者のこのような対応はコンピテンスの拡大にも支障をきたすことになる。

4. 親族への説得

E「一人暮らし反対ですと。心配ですと。親御さんは反対する方のほうが多いですね」、G「（親族は）こんなこと（一人暮らし）はやめてくれと。問題起こるのはわかっているだろうと。放り出す気かっていうてまあね、…（中略）…。（親族も）覚悟がいるんですよ」、H「夜中に暴食したり出歩いたり、まあここ（GH）ではしないんですけど昔してたみたいでね。でやっぱそういうのもあるみたいで。お姉さん的にはもう断固反対で」、I「ご家族の要望としては（一人暮らしではなく）グループホームをやめて、こういった施設に再入所させて欲しいという要望なんです。…（中略）…いろんなトラブルに巻き込まれ続けて心配をずっとされてですね、…（中略）…、そういうのをみてたらもう心配でしょうがない」という発言がある。

親族はGH利用者と同居していないために、現状における利用者のコンピテンスを理解していない。そのため従事者が説明することになるのだが、従事者も利用者のコンピテンスを評価しきれていない、またはコンピテンスに不安を感じているのであれば、このような親族からの反対は、従事者の評価に「追い風」となって、後押しすることにもなる。

5. GH従事者不安感

一人暮らしの阻害因子としては〈GH従事者不安感〉というカテゴリーを生成した。これはGH従事者自身が内面に持つ不安と、利用者が従事者に齎す不安の2種類が存在してくる。従事者はこの二つの不安を背負いながら、利用者の一人暮らしについての意向を聞くことになる。〈GH従事者不安感〉は〔未知の世界〕〔真意の所在〕の2つの概念から構成される。

1）未知の世界

A「ほんとに大丈夫かなみたいな、そこ（一人暮らし）に向けて動いていって、ほんとに大丈夫なのか」、H「大変ですよね。一人暮らしってね。そこを考えるとほんまに勧めていいんかなっていうのもあるんです、自分の中で」という発言がある。

GH従事者は、利用者の一人暮らしの意向についてどのように受け止め、どのように対処していけばいいのか、躊躇している様子を伺うことができる。このような状況を打破するためには、GH内におけるスーパービジョンの体制を確立することや、研修制度を充実させることが必要になってくる。

2）真意の所在

F「本人は、“わしはもう1人になるで”とか言われるんだけど、それが本当に気持ちの中から言ってるのか…（中略）…あえて本人が主張するから、そのまま鵜呑みにして出す（一人暮らし）って、…（中略）…、本人が言うからじゃあそのまま、これはニーズじゃないでしょう」、G「本当かどうかいうのはね、非常にわからないですね。…（中略）…一応即決はできないんですけどもまあちょっと間をおけば変わることってよくありますから」、H「その強い要望あるんですけど、（利用者が）こうくすぶってる感じの部分もすごくみえ隠れみえ隠れするんで、そこをね受け取ってあげんと、その一人暮らししたいんやっていうだけを真に受けて僕らが動いていざ一人暮らししたとしても、やっぱりさみしいってなるかもしれないじゃないですか」という発言がある。

GH従事者は、利用者の一人暮らしに対する表明について、それが真意であるかに苦悩している様子を伺うことができる。利用者の真意を探るためには、利用者の思いを何度も繰り返し聞くことになるのだが、そこで起こる「堂々巡り」こそ、援助における重要な個所となるのではないだろうか。

考察

本調査結果から、GH利用者が一人暮らしへのニーズを明らかとした際、その多くは「現実に突き付けられた阻害因子」と「GH従事者の無意識に生成された阻害因子」という、2つのカテゴリーが課題となって、利用者の前に立ち塞がることになる。

しかし、本調査においてGH従事者に「なぜ、一人暮らしが実現しないのでしょうか？」との質問に対し、多く従事者が最初に指摘していたのは「現実に突き付けられた阻害因子」であった。つまり、これが従事者の最初に思い浮かぶ一人暮らしの阻害因子ということになる。だが、これらの課題は、既存の制度を活用することによって、解消の糸口を掴むことができる他、それが難しいようであれば、従事者は新たな制度作りを行うことや、制度の改正が必要であれば「ソーシャルアクション」を始めとする、組織への働き掛けを行うこともできる。しかし、従事者からは、そのような回答を得ることができなかった。

すなわち「GH従事者の無意識に生成された阻害因子」の結果からも理解できる通り、従事者自身が阻害因子化しているからこそ、「現実に突き付けられた阻害因子」に対する働き掛けを行っておらず、また、そのことに気づいていないからこそ、「現実に突き付けられた阻害因子」を最初に指摘していることになる。そのため、「現実に突き付けられた阻害因子」と「GH従事者の無意識に生成された阻害因子」には「GH従事者の矛盾」が生じていると想定した（矢印①）。

次に、GH従事者自身の阻害因子化について考えてみたいと思う。その要因については「低いコンピテンス評価」の存在を挙げることができる。「低いコンピテンス評価」とは、GH従事者のなかで構築されているコンピテンス評価であって、従事者の意向が強い評価でもある。そのため、従事者はその評価に疑いを持つことができず、日々変化する利用者のコンピテンスに対し、エバリエーションを怠らせてしまい、従事者自身が阻害化していると想定した（矢印②）。

そして、この「低いコンピテンス評価」は「親族への説得」や「GH従事者不安感」からの影響を強く受けることになる。

「低いコンピテンス評価」と「親族への説得」については「親族への説得」が脆弱であればあるほど、コンピテンスの評価は低いといった比例の関係に立っており、「親族への説得」による失敗が重なれば重なるほど、従事者が持つ「低いコンピテンス評価」を正当化させてしまう。そして、このような悪循環は従事者のコンピテンス評価に自信を与えてしまうことになる（矢印③）。

また「低いコンピテンス評価」と「GH従事者不安感」については「GH従事者不安感」が増していれば増すほど、コンピテンスの評価は低いといった反比例の関係に立っており、「GH従事者不安感」が的中すればするほど、従事者が持つ「低いコンピテンス評価」を正当化させてしまい、こちらも従事者のコンピテンス評価に自信を与えてしまうことになる（矢印④）。

結論

本研究結果によれば、GH利用者の一人暮らしのニーズに対する阻害因子は「GH従事者の無意識に生成された阻害因子」であった。そして、その根源には従事者の意向が強く反映された「低いコンピテンス評価」があった。そのため「低いコンピテンス評価」への対応策が求められる。

具体的な対応策については「GH従事者不安感」で指摘した通り、①「スーパービジョン」の体制を確立させることや、②GH従事者による研修制度を充実させること、また「低いコンピテンス評価」で指摘した通り、③第三者によるコンピテンスの評価を取り入れることが必要となる。

そして、本研究結果では、改めて従事者の「質」が問われるような現状も浮き彫りとなった。急増するGHに対して、

障害者の受け皿ばかりを重視した「量」を主体とするような施策を進めていくのではなく、「質」と「量」の両方が伴う施策を進めていくことが実践現場では要求されている。「低いコンピテンス評価」に対する具体的な対応策を挙げるのであれば、この点についても触れておく必要がある。

最後に、本研究はGH利用者による一人暮らしのニーズが阻害されるケースを基に進めている。そのため、本研究成果の一般化を図るためには、更なる研究の必要性があることを今後の研究課題とする。

謝辞

本調査は、財団法人みずほ福祉助成財団平成21年度社会福祉助成金を受けて行ったものである。

文献

金森喜代子(2001):地域生活実現のために ー私の夢…アパートでの一人暮らしー. AIGO534, 東京, p51.

木下康仁編(2005):分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ. 弘文堂, 東京.

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課(2001):平成12年度知的障害児(者)基礎調査.

厚生労働省(2004):障害者(児)の地域生活支援の在り方に関する検討会(第16回). 資料4「知的障害者・障害児に関する支援の在り方作業班における議論(案)」.

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課(2007):平成17年度知的障害児(者)基礎調査.

White, R.W.(1959): Motivation reconsidered: The concept of competence. Psychol. Rev. 66, 297-333.

岬龍一郎編訳(2011):[新訳]老子 雲のように、水のように、自由に生きる. PHP研究所, 東京.

寺島正博(2012):障害者の地域移行への援助 - グループホーム従事者の専門職性. 文芸社, 東京, p170.

牛谷正人(2002):住み慣れた地域で一人暮らしを支える ー障害者ケアマネジメント事例知的障害者). 月刊ケアマネジメント 6, 33.

薬師寺明子・渡辺勧持(2007):「本人主体を志向した支援」における促進要因と阻害要因 ー知的障害者グループホーム世話人を対象として. 社会福祉学 48, 55-67.

The Issues of Assessment of the Competence of Clients with Intellectual Disabilities by Staff Members of Group Home: From the Obstructive Factors Against the Needs for Single Life Based on a National Survey

Masahiro TERAJIMA

School of Social Welfare, Tokyo University of Social Welfare (Ikebukuro Campus),
2-14-2 Minami-ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-0022, Japan

Abstract : Based on the cases where the needs of the users of group home (hereafter abbreviated as GH) for the mentally challenged for living alone have been obstructed by the personnel, this research was conducted in order to analyze and consider the competence assessment of the users and its issues. The subjects of the interview survey were 9 personnel who recognized that the users had needs for living alone based on the national questionnaire survey which had been conducted previously by the author. The analysis took place following the procedure of "the modified version of the grounded theory approach" and was summarized into 11 concepts and 5 categories. As the conclusion, "low competence assessment result" was found out to be a fundamental obstructive factor against the needs for living alone. Therefore, the followings were found out to be necessary; (1) establishing the system of "supervision" , (2) enhancing the training systems by the GH personnel, and (3) adopting the competence assessment by the third party. Additionally, as to the GH measures, it was suggested to be necessary to proceed with such measures that are accompanied by both "quality" and "quantity" .
(Reprint request should be sent to Masahiro Terajima)

Key words : The mentally challenged, Group home, Personnel, Single life, Competence